

英語科編2

第102号

平成21年10月5日

英語科略史 (2) 英語教授学の

はじまり 坪井玄道による通訳授業 日本における英学の始まりは、今から200年前の、文化5年(1808)、長崎におけるイギリスの軍艦フエートン号事件を契機として、翌年文化6年に、長崎のオランダ通詞たちに英語の研修を幕府が命じたことによるといわれています。その後明治維新をはさんで福沢諭吉らの英語学習などがあり、さらに文明開化の風潮もあり、明治5年の学制では、中学校はもちろんのこと、小学校の科目にさえ英語が加えられました。当時の小学校の卒業証書には、「スクール」という語を英字で彫った印が押してあるものすらあったといわれています(山口・未見)。しかし、もちろん満足な英語教授法が確立されているわけではありませんでした。

そのようなときに、新しくつくられた東京師範学校では、明治4年に大学南校(現東京大学)のお雇い外国人として来日していた米国人スコットを、翌年招聘し、授業法に当たらせることにしました。東京高等師範学校の校長にもなった三宅米吉は、当時のことを次のように記しています。

「先生は米国人(スコットの姓・山口)であつて、教育方法を論ぜられるにも英語を以てされ、坪井玄道氏が通訳をやつて其意を學生に知らしめた。・・・」

坪井玄道は、この列伝「体育科編」でも記したように、日本における「学校体育の父」とも称されるように、体育学の歴史で著名な人物ですが、英語においても重要な役割を果たした人物です。この坪井が英語をどのように学んだのかについては、その詳細はわかりませんが、ただ、14歳のころ、江戸に出て開成所(後の東京大学)に入って岡保義という人物について英学を修めたことがわずかに知られているだけです。なお、このスコットについては、森陽外の小説『渋江抽斎』の中にも描かれて

います。

3 附属小学校の英語授業

前記したように、明治の学制では小学校でも授業で英語があることになっていましたが、実際にはほとんど扱われず、明治12年の「教育令」では教育科目から除かれることとなりました。しかし、今度の平成20年度の学習指導要領から、小学校でも英語の授業が実施されるようですが、附属小学校では、廃止されることとなった明治12年の「教育令」の年から随意科として「第6級以上ノ生徒ハ其望ニヨリ英文又ハ漢文ヲ習学スルヲ得ベシ」として、各学年に週3回の授業を実施することにしました。その後時々実施されないこともあったようですが、明治31年の附属中学の外部入試では試験科目に英語を課しており、この入試で英語を課すことは、大正10年まで続けられていきますので、明治20年代の後半から、附属小学校では英語授業が続けられていたと考えられます。

これらのことは、附属小学校の創立百年を記念して作られた『附属百年の思い出』(東京教育大学附属小学校・昭和48年・非売品)からも分かります。例えば、後に三菱銀行会長となる田実涉(附属小大正3卒・28回)などの回顧によれば、当時、石黒魯平(教員名NO19)が英語を教えたこと、それは、他の公立校ではやっていなかったこと、さらに、作家の田地文子(附属小大正7卒)の思い出によれば、英語は男子のみに教えられており、その間女子は裁縫の時間であったこと、小学校の英語は、附属中の教官が交代で教えに行っていたことなど載せられています。

昭和に入ってから附属小では英語の授業は続けられ、昭和15年まで続きました。しかし、戦争による英語の「敵性語」問題などのため、授業は中断されました。ところが、戦後になるといち早く英語の授業は復活し、昭和21年、アメリカの教育使節団が来る前に、桜庭信之(後

に東京教育大教授)が、附属小学校の専任として英語の授業を再開しています。桜庭によれば、「第4学年には週1時間、第5・6年には週2時間で、主として当時のオーラル・メソッドにより、聞き方・話し方の授業であった」ということでした(『東京教育大学附属小学校 教育百年史(昭和48)』)。しかし、その英語の授業も昭和30年に廃止となり、その後、昭和39年から41年にかけて、実験的に授業が行なわれたことがありますが、附属小学校の英語の授業は廃止となり、現在に至っています。

4 附属中の英語授業の始まり

永井荷風の思い出より

附属中学校の英語授業は、もちろん創立のころからおこなわれており、会話などの授業では、現在のA・L・Tにあたる外国人が担当しています。そして、太平洋戦争期にも、他の学校で中止になっていたときも本校ではおこなわれていました。中学校の英語の授業がどのようなものであったかについては、教官列伝の中でおおい記していきますが、明治20年代についてはやや不明のことがありますので、永井荷風の思い出により、その一端だけを書いておきます。

「マイローリーのクライフ伝、バーレーの万国史、フランクリンの自叙伝、・・・」などが日本人教師の訳読の時間に用いられ、「中村敦吉先生が漢文に訳せられた『西園立志編』の原書もたしか読んだように思っている」(永井荷風「16、7のころより」と記しています。その他の人の思い出もありますが、次号以降に記していきます。

- 土井光知他編『日本の英学100年全4巻』研究社 1969 福原麟太郎監修『ある英文教室の100年』大修館 1978 伊村玄道他著『英語教育4 英語教育の歩み』中教出版 昭和55 川澄啓太郎編『資料 日本英学史1・2』大修館 1978 庭野吉郎著『日本英学史叙説 英語の受容から教育へ』研究社 2008 伊村元道『日本の英語教育200年』大修館 2003

